ケイト・フレロン・ヤコプスン
―デンマークのレジスタンスから国際平和運動へ

藤目ゆき

（はじめに）

ケイト・フレロン・ヤコプスン（Kate Fleron Jacobsen, 1909-2006）[1]は、イーダ・バクマン(Ida Bachmann, 1900-1995)と共に、国際民主女性連盟（WIDF）が朝鮮戦争戦場へと派遣した国際女性調査団に参加したデンマーク代表の女性である。ケイトは 21 人の調査団員のうちで唯一人、「オブザーバー」としての立場を堅持した。彼女は保守政党で活動した経歴があり、リベラルで民主主義的な西欧的価値を信じ、ソ連や東欧の人民民主主義諸国に警戒心を持ち続けていた。WIDF 調査団には東西両陣営 17 か国から多様な宗

イーダ・バクマン（左）とケイト・フレロン・ヤコプスン（右）

[1] デンマーク語の人名表記に関しては、新谷俊裕・大辺理恵・間瀬英夫編『ＩＤＵＮ －北欧研究－ 別冊号　デンマーク語固有名詞 カナ表記小辞典』(大阪大学世界言語研究センターデンマーク語・スウェーデン語研究室、2009 年）を参照した。

教・思想信条・政治的立場の女性 21 人が参加したが、ケイトはそのような WIDF 調査団において、いかにも西側代表らしいイメージを与える女性だったと言えるだろう。

本稿は、アジア現代女性史研究会が取り組んでいる冷戦時代の国際女性運動に関する研究、とりわけ WIDF 調査団に関する研究の一部として、ケイトがどのような背景から WIDF 調査団に参加し、調査団においてどのような役割を果たしたのかを明らかにするものである。ケイトはデンマークでは著名なジャーナリストであり、デンマークの複数の人名辞典に詳しい伝記が載っている。特にナチス・ドイツがデンマークを占領した時期のレジスタンス活動に起源をもつ雑誌『自由デンマーク（Frit Danmark）』の編集者として知られている。が、それらの辞典には、彼女が WIDF 調査団の一員として活動した内容に関する詳しい言及はない。そこで本稿では、先ず第一章においてケイトの生いたちやレジスタンスの経験を概観し、その後の三つの章において彼女の WIDF 調査団への関与がどのようであったかを明らかにする。

ケイト・フレロンは、筆者が WIDF 調査団の研究を始めた当初から心惹かれる女性であった。WIDF 調査団でオブザーバーに徹した彼女がどのような人であったのかという関心はもとより、女性ジャーナリストの草分けであり、レジスタンスの闘士であった彼女の生涯が女性史的な興味をかきたてるからである。とはいえ日本には彼女の情報はほとんど何もなく、筆者にとってデンマーク語という言語のハードルも高かった。そこで筆者は大阪大学外国語学部デンマーク語科の田辺欧さん、そしてケイトと親しい友人であったホウマンとビアデ・フーイ・ブラスク夫妻の甥にあたるデンマーク人のティム・パリスさんに協力をお願いし、2012 年の夏にコペンハーゲンの王立図書館、KVINFO（デンマーク女性・ジェンダー情報センター）、レジスタンス博物館、デンマーク平和アカデミーなどを訪ねて資料を収集し、生前のケイトを知るデンマークの人々にお話を聞かせていただいた。デンマーク語の翻訳と通訳は、当時コペンハーゲン大学の学生であったレアケ・シュタイマンさんのお世話になった。本稿はこうして得られた諸資料を参照して執筆し、出典はそれぞれ註に示した。が、ケイトの著作はいずれも内容が豊かであり、本稿の主題に直接関係のある部分だけを引用するのでは物足りない。そこで、それらの一部の日本語訳を付属資料として添付することにした。本稿とあわせて参照していただければ幸いである。

第一章　ナチス・ドイツ占領下のレジスタンス

第１節　自由デンマーク

ケイト・フレロン・ヤコプスンは1909年6月16日、デンマークの首都コペンハーゲンに生まれた。父はヴァルデマール・フレデリック・フェルディナンド・フレロン・ヤコプスン(1869-1934)、母はノニー・マーガレト・バウディ(1885-1957)である。文化意識の高い、民族感情に価値を置く、裕福で保守的な家族の一人娘として育った。ケイトは、祖父のフェアディナン・バウディツに励まされて、幼い頃からジャーナリストになろうと決めていたという。両親は最初はそれに懐疑的だったが、後には娘を応援した。両親が離婚したということもあり、ケイトは結婚して子どもを生むという伝統的な女性の生き方を疑い、自立を希求して家を出る。1928年にマリー・クルーゼ高校を卒業した後、ヒレレズの『ノアシェラン・ヴェンストレブラズ』紙の記者となり、その後保守系の雑誌『全国ジャーナル』誌の記者として1930年から1942年まで勤めている。男性中心的なジャーナリズムの中で当初は女性分野の記事しか担当できなかったが、1934年にオーウ・スコック(Aage Schoch: 1898-1968）が『全国ジャーナル』編集長になると彼女が医療問題の責任者に任じられ、医療分野の記者としても活躍するようになった[2]。

第二次世界大戦下の1940年4月9日、ナチス・ドイツの軍隊はデンマークを占領した。デンマーク政府はこれに抗議したものの、結局「ドイツがデンマークの独立を認めるがドイツ軍がデンマークに駐留する」という占領軍による提案を受け入れた。そうした妥協がデンマーク人の安全にとって最善だとデンマーク政府は考えたのである。ケイト・フレロンとオーウ・スコックはドイツのデンマーク占領に批判的な態度をとった。そのためドイツからの要求によってオーウは1942年1月1日に『全国ジャーナル』を解雇されてしまい、ケイトもその後すぐに記事の主題の制限や減給という受け入れ難い要求をつきつけられた。それはいわば体裁の良い解雇通告であった。失職したケイトは、生計を立てるためにフリーランスで書き続け、図書の刊行も行った。1942年には、保守人民党の政治家でありドイツ女性協会や保守人民党女性委員会で活躍してきた保守系フェミニストのリスベト・ヒンスガウル(1890-1969)[3]と協力し、約30人の女性作家から寄稿を得て、『デンマークの女性』を刊行している。また、ケイトは『道を踏み外す若者たち』(1942年)や『われら若者』(1943年)といった本も出し、性と道徳に関

---

[2] 'Kate Fleron (1909 - 2006)': KVINFO（ジェンダー・平等・多様性のためのデンマーク研究活動センター）の女性人名辞典: http://www.kvinfo.dk/side/170/bio/668/

[3] ヒンスカウルについては、'Lisbet Hindsgaul (1890 - 1969)' : KVINFO(同前、女性人名辞典、http://www.kvinfo.dk/side/597/bio/443/origin/170/）参照。

する激しい論争を巻き起こした。この頃、ケイトはオーウと恋愛関係にあったが、ケイトは結婚を望まなかった。

ナチス・ドイツによるデンマーク占領下、保守人民党の指導者クリスマス・ムラと共産党の指導者アクセル・ラースンは広範なレジスタンスのための国民的団結をめざして交渉し、両党の協力を背景として 1942 年 4 月に超党派の非合法新聞『自由デンマーク』が創刊される。この雑誌は月刊で出版され、レジスタンスの非合法報道を牽引した。1942 年 12 月のある日、ケイト・フレロンは人民党支持者で『全国ジャーナル』時代の同僚だったオーレ・キーラリッチ(1907-1983)から連絡を受ける。キーラリッチは『自由デンマーク』の編集に従事していたのだが、『自由デンマーク』の関係者の多くが逮捕されるか警察の追跡を逃れるため姿を消しており、彼自身も逃走中であった。彼は、保守人民党の支持者として活動したことのあるケイトに、自分に代わって保守派の代表として編集部に加わるように頼みにきたのである。ケイトはこれを受け、1943 年 1 月に『自由デンマーク』の編集部に入った。それからの彼女の活動は、資料の収集・記事の執筆といった編集者・記者としての仕事のみならず、デンマークのレジスタンスを後援する英国の特殊作戦執行部 SOE（Special Operations Executive）のパラシュート部隊の支援や危険な地下活動を行う市民パルチザンたちのための隠れ家の手配にも及んだ。彼女はレジスタンス活動における多くの重要人物とコンタクトをとりながら様々な形態での非合法活動に従事し、レジスタンスの地下活動の世界で「クローウ嬢」の変名で知られるようになった[4]。

1943 年 8 月 29 日、それまで不承不承ナチス・ドイツに従っていたデンマーク政府は、ドイツからのレジスタンス鎮圧の強要を拒否し、内閣辞職にいたった。そこでドイツが政権を掌握し、デンマークは名実ともにドイツの「被占領国」となり、デンマークのレジスタンスは正統性を認められることになった。このような状況のもと、英国の SOE の支持を得て、1943 年 9 月、デンマーク共産党・『自由デンマーク』編集部をはじめとするデンマークのレジスタンス運動を担う多くの団体が地下活動の統一組織「デンマーク自由評議会（Danmarks Frihedsråd）」を創設する。その中心になったのは、共産党のバアウ・ホウマン、モーウンス・フォウ、 デンマーク統一党のアーネ・サアアンスン、リング（レジスタンス・グループ）のフローゼ・ヤコプスン、 『フリーデンスケ』紙のエアリング・フォス、オーウ・スコックらである。ケイト・フレロンにとって同志であり恋人であったオーウ・スコックは、パラシュート部隊や非合法出版物など多方面にコンタクトがあり、自由評議会に最初から参加した中心人物の一人であった[5]。自由評議会が設立されると『自由デンマーク』はその報道媒体として不可欠の役割を担い、ケイトは 1944 年春になるとレジスタンス情報網の拡大に応じて『自由デンマーク』週刊ニュースの編集も行うようになった。彼女は最後まで『自由デンマーク』の重要な運営会議に参加し続けた。

---

[4] Merete Harding, Inga Dahlsgård: Kate Fleron i Dansk Biografisk Leksikon, 3. udg., Gyldendal 1979-84. Hentet 19. januar 2017 fra http://denstoredanske.dk/index.php?sideId=289519

[5] Verner Jespersen: Aage Schoch i Dansk Biografisk Leksikon, 3. udg., Gyldendal 1979-84. Hentet 21. januar 2017 fra http://denstoredanske.dk/index.php?sideId=297128

第2節　フレスリウ強制収容所

1944年9月1日の深夜から2日の未明にかけて、ケイト・フレロンとオーウ・スコックはゲシュタポに逮捕され、コペンハーゲンの西部監獄に連行される。オーウはその後すぐにコペンハーゲンのカムプゲーゼにあるシェル・ハウスに連行された。元はデンマークのシェル石油が本部を置いていたこの建物は1944年に接収されており、デンマークにおけるゲシュタポの本部として利用されていた。ケイトは数週間後、西部監獄からフレスリウ収容所に移送された。フレスリウ収容所は、デンマーク人のドイツの強制収容所への移送を避けるためにデンマーク政府が1944年1月、デンマーク内に強制収容所を建設することを提案して設立された収容所である。ドイツの占領当局はこれに同意し、フレスリウ収容所はデンマーク南西のドイツ国境にほど近いフレスリウの村の近くに建てられた。1944年8月中旬から1945年5月のドイツ占領終結までに12,000人が収容されている。収容者のほとんどは男性であり、その大半はレジスタンスのメンバー、共産主義者やその他の政治犯であった。収容所内の生活条件は概して許容できる水準であったものの、およその数で12,000人のうち1,600人はドイツの強制収容所に移送され、そのうち220人がそこで死亡した。戦争が終わる頃、スウェーデン赤十字のフォルケ・ベルナドッティはスカンジナビアにある強制収容所に囚われた人々を全員スウェーデンに帰還させようとし、それと時を同じくしてデンマーク政府はドイツの収容所に囚われているデンマーク人の救出についてドイツと交渉した。その結果、多くの人々がドイツの強制収容所から解放されることになり、1945年の3月と4月に10,000人のデンマーク人およびノルウェー人がドイツを脱出した。こうして戻ってきた人々の一部はフレスリウ収容所に入れられた[6]。

フレスリウ収容所　　フレスリウ博物館のホームページより

[6] フレスリウ収容所については、' Frøslevlejrens historie (1944-1945) ':http://natmus.dk/museerne/froeslevlejrens-museum/lejrens-historie/froeslevlejren-1944-1945/及び"The Frøslev Camp Museum – a WW2 prisoner of war camp': http://en.natmus.dk/museums/the-froeslev-camp-museum/

ケイトがフレスリウに到着した時、女性収容者は 50〜60 人ほどだった。が、後には増えて、150 人近くになった。女性たちは 8〜10 人が同じ部屋に収容されており、午前 6 時半から 7 時の間に起床し、1 時間後、4 列に並ばされ、金切り声をあげるドイツ人の警備兵の監視付きで鉄条網の向こう側にある食事用バラックに行進することから一日が始まる。男女のバラックは鉄条網で隔てられており、女性たちは靴下の修繕のような軽作業、男性たちは重労働をわりあてられた。ドイツ人は鉄条網越しに話すことを禁じたが、収容者たちはそれを無視して鉄条網の両方から包みや手紙をやりとりし、勇気を与え合った。収容人数が増えて食料配給が不足してくると、ケイトたちは配給物をとっておき、パンやソーセージ、パテを包んで有刺鉄線越しに男性の同志たちに送ったという。

ケイトは解放後まもなく、『ベアリングスケ・アフテンアヴィース（夕刊）』紙にフレスリウ収容所について次のように書いている。

> 私たちに襲いかかろうと待ち構えている不吉な雰囲気が、同志たちの運命の不確かさについての苦悶とともに、つねに漂っていた。拷問、病気、死、そして「ドイツへの移送」の知らせは、悪夢のようにフレスリウ収容所にまとわりついていた。兵士たちがバラックからバラックへと押し入り、ドイツ行きとなった人々の名前を叫ぶのは朝の 5 時か 6 時頃のことだった。噂はすぐに女性たちのバラックに届き、ゆらめく炎のように恐怖が私たちの心に宿った。自分の息子が、自分の夫が、自分の友人が連れて行かれているのか？ 私たちのうちの誰かが連れて行かれているのか？
>
> 暗く霧の深い冬の朝、私たちは鉄条網のそばに立ち、群衆のなかで最も近いバラックの入り口から出て行った人物の姿をなんとか見つけようとした。出かけていって別れの言葉を告げることが許されるのは稀で、親しい家族が出発するときに限られていた。「ニルス！さよなら、ニルス！」と女性が叫ぶと、霧のなかから大きくはっきりした声で「さよなら！すぐに戻ってくるよ」という答えがかえってきた。そうして男性たちはナチの強制収容所の地獄へと行進していくのだった。[7]

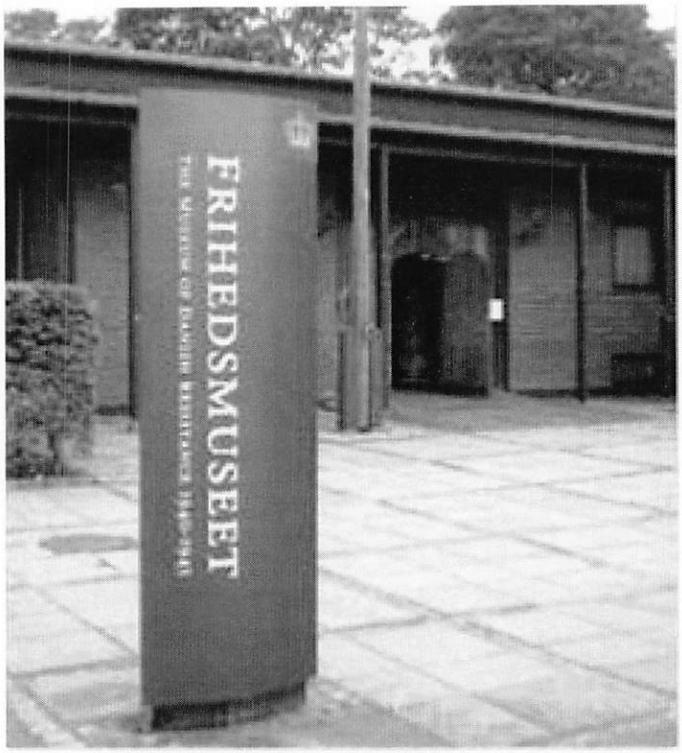
ケイト・フレロンは逮捕から 9 か月後の 1945 年 4 月 11 日に解放され、自由の身でドイツの降伏を迎えた。オーウ・スコックも、ケイトがコペンハーゲンに生還する少し前の 1945 年 3 月 21 日、英国の爆撃で破壊されたシェル・ハウスから脱出して無事だった。自由をとりもどし、愛する人々と再会したいというケイトの熱望は実現した。が、解放から数日も経つと未だ囚われているレジスタンスの同志たちを思い、罪の意識のような感覚に囚われた、とケイトは回想している。同志たちと一緒に解放の日を迎えられなかったのは、過ちだったのではないか？ 彼女は「自分が共同体を裏切ったように感じた」という[8]。

---

[7] Kate Fleronn, 'Blandt Kvinderne i Frøslev', in Berlingske aftenavis, 1945-05-11.
ケイト・フレロンは戦争が終わった後、『レジスタンス闘争のなかの女性』を出版し、そのなかに彼女自身のフレスリウ収容所での体験を書いた。

[8] 同前

レジスタンス活動を通して、ケイト・フレロンは変わった。保守的な家庭に育ち、かつては保守人民党に共感を抱いてその活動にいそしみ、保守派代表として『自由デンマーク』に参加したわけだが、バアウ・ホウマンやモーウンス・フォーのような共産主義者たちと共にナチス・ドイツに抵抗する地下活動を行い、戦争が終わる頃には保守派というより中道左派というような位置に立っていた。ホウマンたちとの友情は戦後に続き、ケイトは自身が共産党に入ろうとはしなかったものの、共産党との距離は近くなっていった。戦争が終わり 1945 年の夏に自由評議会が改称して「自由運動協議会（FrihedsbevægelsensSamråd）」が結成されると、ケイトもそのメンバーになった。彼女は編集者として戦後も『自由デンマーク』を引き続き発行し、それは 1982 年に停刊するまで、政府・政党から独立した自由な公論を喚起する雑誌として続くことになった。レジスタンスの最中にヨーロッパ各地に多数、レジスタンスの非合法誌が発行されていたが、戦後にこのように長く発行が続いた例は稀有だという。戦後のケイトが経験した別の大きな変化は、1949 年に事実婚の状態のオーウ・スコックとの間に娘リサが生まれたことである。オーウは戦後、『ベアリングスケ・ツーナ』紙、『ベアリングスケ・アフテンアヴィース（夕刊）』紙、『フレンスボルグ・アヴィース』紙などでジャーナリストとして働き、またレジスタンス博物館の幹事会長（1946-58 年）、占領下政治囚全国協会会長（1947-49 年）をつとめ、1968 年に他界するまでケイトの『自由デンマーク』発行を支えた[9]。



コペンハーゲンのレジスタンス博物館。筆者が訪問した翌年の 2013 年に火事で焼失。

なお、ケイト・フレロンは WIDF 調査団に加わる 1951 年まで、特に WIDF のメンバーとして活動していたわけではなかった。その彼女が WIDF からの招待に応じて朝鮮へ行ったのは、『自由デンマーク』の編集者として朝鮮戦争の現況を自分自身の目で確かめて記事を書きたいという念願があったからだろう。また、WIDF に対する興味もあったことだろう。WIDF は 1945 年、戦時下に生まれた反ファシズム・レジスタンスの国際的ネットワークを背景としてパリで創設され、1948 年には WIDF のデンマーク支部としてデンマーク民主女性協会（DDK)が結成されていた。DDK はアウネーテ・オルセン(1905 - 1990)

(9) 註(5)に同じ。

が会長、エレン・フーロプ(1871-1953)やヴォールフリッド・パームグレン・ モンクーピーター(1877-1967) らが理事をつとめ、男女平等の賃金や妊娠中絶の自由化といった女性の権利のための課題にも取り組んでいた。中心的な活動家の中には、インガ・ミレーデ・ノルデントフト(1903-1960)やルート・エリザベット・ヘアマン(1904-1973)のような、戦時下のレジスタンス活動の仲間たちもいた[10]。

仲間の見送りを受けるケイト・フレロン(右) とイーダ・バクマン(左)

第二章　WIDF 調査団唯一のオブザーバー

第 1 節　チェコスロバキア

WIDF 調査団に参加した女性のなかの 16 人は、最初の集合場所としてプラハに集まった。WIDF 加入団体であるチェコスロバキア女性同盟が調査団の受け入れ団体として各国の代表たちをもてなし、代表たちはプラハのアクロン・ホテルに宿泊した。先に到着した女性たちは次の合流点モスクワへ出発するまでの数日を、プラハやその近郊の見学などをして過ごした。ケイト・フレロンとイーダ・バクマンは、キューバのカンデラリア・ロドリゲス、英国のモニカ・フェルトンに続いてプラハに到着した。モニカは後に出版した旅行記に、初めて出会った時のケイトの印象を、「長身で色白で、とても綺麗だった。髪はカールして、バター色のフエルトの帽子に巻き込んでいた。細面で鼻筋が通ってとがり、

[10] DDK の女性たちについては、前掲の KVINFO の女性人名事典に詳しい。ルート・エリザベット・ヘアマンは、アウネッテ・オルセンが病気で会長職を退いた後、DDK の会長になった。

口が大きくてくちびるがふっくらしていた」[11]と書いている。

ケイトたちが滞在したとき、チェコスロバキアは大規模な粛正の最中であった。前の外務大臣ウラジミール・クレメンティスは前年の 1950 年に辞任させられており、どこかに連行されたまま行方不明であった。後に、クレメンティスは元党書記長ルドルフ・スラーンスキーらと共に「ブルジョワ民族主義・トロツキー主義・シオニスト」の国家転覆に関わった容疑で起訴され、1952 年 12 月 3 日処刑されることになる。ケイトは、人民民主主義の明るい未来を標榜するプラハにあって、その水面下に粛正が進められている緊迫感を感じとっていた。ケイトは後に発表されたチェコスロバキア滞在記の中で、イーダ・バクマンやモニカ・フェルトンと泊まったアルクロン・ホテルについて、そして「プラハにいることの不快」について、こう書いている。

> 後日、私は『ポリティケン』紙（デンマークの新聞）の一面でチェコの治安警察はアルクロンのすべての部屋に盗聴器を設置しているという UP 電の記事を読んだが、私たちの何人かは壁の中にマイクが仕掛けられているとは疑いもせず、デンマーク語や英語で大声でプラハにいることの不快さを言い募っていた[12]。

クレメンティスの消息が途絶えたのは不気味なことだった。「国民が崇拝していた人物の一人、民主プラハの政府公舎に掲げられた横断幕から慈父のような目で大衆を見下ろしていた男が一夜にして犯罪者に変わってしまう」。ところがプラハでは誰もが人民民主主義革命を礼賛し、「西欧資本主義や米帝国主義」に協力する「敵」や「裏切り者」の摘発は感謝してしかるべきこととされている。ケイトは、チェコスロバキア女性同盟の上品で教養ある女性たちが毎日 WIDF 調査団を賓客としてもてなしてくれることに感謝しつつも、居心地が悪く、ソ連と東欧人民民主主義を手放しに礼賛する物言いに閉口し、うんざりすることもあったようだ。戦時下の米軍によるチェコスロバキア爆撃の被害やチェコスロバキア難民に対する英国の冷遇の数々を聞かされて、ケイトは「まるで戦争中のあなた方の敵はドイツじゃなくて、米国や英国だったようだわね」と皮肉に応えたことがあった。国をあげて盛大に平和プロパガンダが行われ、ケイトは「スターリンとゴットワルトと平和のために」という乾杯とスピーチで息をつくことができないほどで、「大きなポスター、飛び立つ鳩、横断幕で目眩がする」ようだった。ジョギング中の若者たちに「何のために走っているの？」と聞くと、「平和のためです」と大真面目に返事をされて唖然とする場面もあったという。5 月 1 日のメーデーは「平和」をテーマに公的な祝賀行事が催され、クレメンティスの後任ゴットワルトによる朝鮮に関する演説で集会が始まったが、「見たところ誰もその話を聞いていなかった。もっとも、『米占領軍と戦う朝鮮人民への熱い連帯のメッセージ』が終わると、莫大な拍手が巻き起こった」と、ケイトは冷めた目で観察していた[13]。

---

(11) Monica Felton, That's Why I Went, Lawrence & Wishart, 1953, p.26.
(12) Kate Fleron, 'På rejse i den anderen verden. Nogle indtryk fra Tjekkoslovakie'（別の世界への旅ーチェコスロバキアからのいくつかの印象）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.6(1951).S.12-16:12-13 頁
(13) 同前、13 頁

もっともケイト・フレロンはチェコスロバキアに対して悪感情だけを抱いたわけではなく、好意的な印象をも書き残している。初日の午後に訪ねた工業都市ゴットワルドフでは住宅水準の高さに気がついた。そして、「温泉、タトラ山のホテル・プラハ、そしてカルルスブルンという名のもう一つの海辺の町への訪問が、社会主義に向かう社会へのこの短い訪問の中で最も豊かなものとなった」(14)という。なぜなら、そこではふつうの労働者とその家族が、かつて特権階級だけが利用できた保養地の豪奢なホテルで休暇を過ごし、幸せそうに見えた。「上層階級の人々だけが享受することができる喜びについて感じる暗い不快感から解放されるという経験ができたことは良かった」と、彼女は振り返っている。

ケイト・フレロンはWIDF調査団の中で不偏不党のオブザーバーに徹する決心だった。プラハに集合した16人の女性が話し合い、朝鮮で見るべきものに関する合意文書を準備しようという意見が出てきたとき、モニカ・フェルトンは事前に合意文書を作ることに強く反対を唱え、政治的な立場や見方が異なる女性たちが構成する調査団なのだから、同じ物事を見てもその解釈が一致するとは限らない、と主張した。もちろん合意のできることなら署名するが、合意ができるかどうかは保証できない、と。他の代表たちからもそれに賛成の声が出た。特にケイトはモニカの意見に賛同し、モニカ以上にはっきりと合意文書の作成に反対した。自分自身が共同文書に署名することによって、いかなる党派にも属さない独立したオブザーバーとしての立場がそこなわれることを危惧していたからである。16人の間のもう一つの論点は、北朝鮮だけでなく南朝鮮をも視察地域に含めるかどうかということであった。ケイトとモニカは強くそれを望んだ。プラハでの話し合いに関する限り、他の女性たちも可能なら追求してみるべきだと考えているようだったという(15)。

第2節　ソ連・中国

調査団の次の合流点はモスクワであった。ケイト・フレロンのソ連滞在記には、体制の如何とは別の、穏やかで暖かく優しいロシア人気質に魅せられたことや、デンマークの孤児院と大差ないモスクワ郊外の孤児院を見学したこと、クレムリン宮殿のこと、見事な地下鉄やボリショイ劇場で鑑賞したバレエの感激などが書かれている。モスクワの地下鉄については、「（これは）人民への新しい社会の贈り物であり、かつては上流階級だけが宮殿のなかで楽しんでいた豊かさや喜びを享受するのが今では自分たち人民の順番なのだということを大きく保障するものとみなさなければならない」(16)と評している。バレエ「赤い罌粟」については絶賛し、「その才能、美しさ、想像力、壮大さのそろい踏みに心を奪われた。劇場は満員だったが、誰もがこの最後のきわめて民族的で国際主義的な、ロシア人と中国人の共産主義の宣言の場面では誰もが立ち上がった」(17)と賛辞を贈っている。このような滞在記から窺うことができるのは、彼女が教条的で硬直したスターリニズムに対

(14) 同前、16頁
(15) Felton, op.cit., pp.35-36.
(16) Kate Fleron, 'Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. II. Genfindelser og opdageiser i Moskva Kate'(別の世界への旅ーモスクワの復興と発見）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.7(1951).S.5-8: 7-8頁
(17) 同前、8頁

しては不快感や警戒心を持ちつつも、国々の政治体制の選択以前にそれぞれの国に存在する民族文化の持つ価値や平等と民族解放の実現をめざす社会主義諸国の努力に対しては賛辞を惜しまない、フェアな精神の持ち主だったということである。このバレエに贈られた称賛と共感は、それぞれの民族の解放はそれぞれの民族自身によってしか担われないが、その解放の闘いは国境を越えた連帯によって支えられているというケイト自身の所信の表出であり、その所信は彼女自身のレジスタンスの体験に発するものだっただろう。

それでもモスクワ滞在中にケイトの「オブザーバー」でいることへの決心に変わりはなかった。モスクワではソビエト反ファシズム女性委員会の副会長マリア・オブシアンニコワも加わって 17 人で相談会が行われたが、南朝鮮訪問をめぐって意見は対立した。ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンは国連に調査団の南朝鮮訪問を認めるように求め、南朝鮮へ行けるよう試みるべきだと主張した。が、オブシアンニコワはそんな考えを馬鹿げているとみなし、プラハでケイトやモニカに同調していた女性たちも態度を変え始めた。モニカは後に、そうした意見対立のために一時は調査団は何一つとして合意に達することができそうにないように思われたほどだった、と回想している[18]。

中国の瀋陽で中国人の李鏗・白朗・劉清揚とベトナム人のリティクェが合流し、WIDF 調査団 21 人全員がようやく集合した。が、その最初の会議の場でプラハやモスクワから持ち越されていた争点が一挙に表面に出て、激しい言葉のやりとりになった。ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンは、調査団は真相調査を目的に組織されているのだから、調査の実施前に合意文書を作ったり共通の立場を表明したりするべきではない、と強く主張した。他方、中国の白朗やソ連のオブシアンニコワ、そしてカナダのノラ・ロッドたちは、「朝鮮戦争がアメリカ帝国主義による侵略であり、その占領下で朝鮮人民が虐殺蛮行被害を被っている」のは明白な事実であり、調査団がそのような立場を採るのは当然のことだと考えていた。議論は紛糾したが、オブシアンニコワが歩み寄る発言をしたことを契機に、調査団は「真実を発見すること」という共通の目的に向かって旅程の打ち合わせや編集委員の選定といった具体的なプロセスに入ることができた[19]。

写真中央は李鏗、一番右はモニカ・フェルトン。空襲直後の安東。

ケイト・フレロンとモニカ・フェルトンの感覚や考え方は似ており、二人とも共産党員でもなければ WIDF のメンバーでもなく、西欧の民主主義的価値に親しんでおり、様々な立場の女性たちが調査団を構成しているこ

(18) Felton, Op.cit., p.49.
(19) Ibid., pp.64-71.

とに高い価値を感じていた。しかし、報告書の編集に関しては二人のスタンスに違いがあった。編集者であり作家でもあるメンバーとしてケイトも編集委員の候補に挙がったが、オブザーバーの立場をとると決意していたケイトは辞退した。無責任な部外者の位置に留まろうとしたからではない。ケイトは戦場の真実を曇りなく自分の目で確かめるために、そうすることが必要だと考えていたのである。その一方、モニカは自分から立候補し、編集委員に加わった[20]。

WIDF 調査団は瀋陽から寝台列車で夜に出発し、未明に朝鮮との国境への町・安東に到着した。米軍の空爆は中国領内にも及んでおり、安東の街も大きな被害を受けていた。駅につくやいなや、ケイト・フレロンはすぐに「既視感」を感じたという。

> 戦時中の暗い街、何か起こる気配、静かな怒声、武装した兵士、迎えられジープへと護衛されるときのピリピリした行動。通りを通る急ぐ速度。私はこれらをすべて知っていた[21]。

戦禍が及んでいた中国・朝鮮国境は、第二次世界大戦下にナチス・ドイツによって占領された母国の暗い日々を彷彿とさせたのである。

第三章　WIDF 調査団の朝鮮訪問

第 1 節　新義州と平壌

調査団が鴨緑江を渡り、最初に踏みしめた朝鮮の土地が新義州である。彼女たちは新義州で市長と市民から概況の説明を聴いた後、数人ずつに分かれて空爆で廃墟と化していた新義州のあちこちを歩き回った。ケイト・フレロンはイーダ・バクマンと連れ立って、人々の生活を自分自身の目と耳で感じとろうとした。大人たちは見慣れない白人女性を見つけると興味をもって自分から話をしに来たり、家を焼け出されてから仮住まいをしている防空壕の中に招き入れてくれたりしたが、子どもたちは怖がって、彼女たちが近づくと逃げていってしまう。そこで初日からケイトたちは一包みのお菓子をプレゼントし、子どもたちと仲良くなることを思いついた。モニカ・フェルトンが離れた所に立って見ていると、ケイトとイーダが、小さな男の子の手をひいて赤ん坊をおんぶしている女の子にプレゼントの包みを渡して話を聞いていた。後でケイトとイーダに聞くと、その女の子は 6 歳で、空襲で家を失った後、家族は防空壕で暮らしていた。母親は爆撃で死に、父親は一日中働いているので、その女の子が赤ん坊と 3 歳になる弟の世話をしているのだという[22]。

---

(20) Ibid., pp.71-72.
(21) Kate Fleron, 'Spredte indtryk fra en rejse i den anderen verden. IV.Kvinder i det nye Kina'（別の世界への旅ー新中国の女性たち）, in Frit Danmark, Årg.10, nr.9(1951).S.11-15: 15 頁。
(22) Felton, Op.cit., p.92-93.

絶えず空襲警報が響くような状況のなか、安全のために調査団の移動は夜間に行われた。朝鮮民主女性同盟は、WIDF 調査団が活動拠点として使うことができる「本部」として、平壌の近くの場所に施設を手配していた。女性たち 21 人は暗くなってから新義州を出発し、発見されにくいように互いの間隔を大きく開けた数台の車両に分乗して「本部」に向かった。モニカ・フェルトンとノラ・ロッドが乗ったジープは溝にはまったり道に迷ったりとトラブルが続いて長い時間がかかったが、それでも未明に「本部」に着いた。ところがケイトとイーダの乗ったジープは溝にすべりこんで動けなくなり、二人は近くの村まで歩くほかなくなった。幸運だったのは、彼女たちがその村の村長の家で数時間眠ることができ、さらに翌日の午前中に住民たちと交流するチャンスを得たことだった。村長はドイツ語ができ、通訳も引き受けた。同日午後にケイトたちが調査団「本部」に合流すると、村人たちの名前と話を記録したノートをひっぱりだしてモニカたちに見せ、聞き取った内容を聞かせた。それは米軍占領中の女性への拷問やレイプ、食糧の破壊など、信じたくない内容であったが、ケイトもイーダも村人たちから聞いた話を疑っていなかった[23]。

モニカ・フェルトンによれば、WIDF 調査団の「本部」は平壌から 24 キロほど離れた郊外にあったが、その場所に居ても雷鳴のような空爆の音が聞こえ、爆弾が炸裂する閃光が見え、頭上の屋根が振動するのを感じたという。WIDF 調査団はこの「本部」で、安東まで通訳たちを伴って調査団を出迎えた韓興珠、朝鮮民主主義人民共和国の文化宣伝相であり新義州で調査団を迎えた許貞淑と再会し、朝鮮民主女性同盟の朴正愛とも初めて顔をあわせた[24]。調査団の女性たちはここで新義州に関する報告を文書にまとめている[25]。

朝鮮民主女性同盟会長 朴正愛　右:文化宣伝相 許貞淑

「本部」から平壌市への移動も夜間であったが、5 月 18 日の夜から 19 日の未明にかけて空襲が続いたため、やむをえず一行は防空壕へ退避し、そこで日が昇るのを待った。5 月 19 日は丸一日を平壌で過ごしている。牡丹峰では破壊された仏寺を訪ねた。彼女たちはここで、許貞淑の父親であり、日本植民地支配時代から抗日民族解放運動家であり、当時金日成総合大学総長であった許憲から話を聴き、柔和な人柄の許憲が取り返しのつかない文化財の破壊に悲憤する姿に接している[26]。調査団は、広々とした田園の中にある寺の位置から判断して、米軍の爆撃機が何か他の目標を狙っていたとはとうてい信じられなかった。平壌では大学や学校、博物館、さらに病院も空

(23) Ibid., p.98-109.
(24) Ibid., pp.111-112.
(25) 新義州に関する報告は、WIDF 調査団報告書の第 1 章である。前掲『国連軍の犯罪』205-208 頁。
(26) Felton,Op.cit., p.112.

襲の被害にあっていた。病院は赤十字の印がついていたにもかかわらず焼夷弾を落とし、そのために焼け死んだ患者たちもいたという。調査団一行が平壌に滞在した 5 月 19 日だけで 5 回の警報が鳴り、その同じ日に約 1 週間前に落とされた時限爆弾が 3 つ、調査団のメンバーと地方組織の代表が話し合っていた場所のすぐ近くで爆発した。平壌はいたるところ廃墟であった。調査団は 4 グループに分かれて 4 時間近く市の様々な場所を訪れたが、その間誰一人として四方の壁と屋根のある家を一軒も見なかった。防空壕暮らしの平壌市民たちからは米軍占領中のさまざまな恐ろしい体験を語られた。米軍がオペラハウスやその付近の住家を軍用娼家にして朝鮮の女性を街頭から拉致して連行したという証言や、女性団体のメンバーが性的な拷問を受けて惨殺され、その幼児まで生き埋めにされたという証言も聞くことになった。調査団は翌日「本部」に戻り、このような調査内容を 21 日付の報告文書にまとめている[27]。

Delegationen holder møde i landsbyen uden for Pjen-Jang, hvor vi havde hovedkvarter. Ved bordet sidder fra venstre: den belgiske dr. Hannevart, Ida Bachmann, formanden, mrs. Rodd, Pak-den-Ai, den koreanske demokratiske kvindeorganisations præsident, englænderinden Monica Felton og den franske delegerede mde. Gilette Ziegler.

平壌郊外の WIDF 調査団の本部にて。テーブルの左からベルギー代表アンナヴァツ、イーダ・バクマン、ノラ・ロッド、朝鮮民主女性同盟会長 朴正愛、英国のモニカ・フェルトン、フランス代表ジーグレル

(27) 平壌に関する報告は、WIDF 調査団報告書の第二章である。前掲『国連軍の犯罪』208～215 頁。

第2節　平安南道

5月22日から24日にかけて調査団は北朝鮮の4地域に分散して調査を行った。ケイト・フレロンとイーダ・バクマンはフランス・ベトナム・アルジェリア・チュニジアの代表たちとともに平安南道を調査するグループに入り、江西や南浦を訪ねた。

ケイトは後に、「南浦は人々への災厄に私たちが最も強烈な衝撃を受けた都市だった」と書いている。米軍占領中に1,600人の朝鮮人が殺害されたという南浦では、米軍撤退の後も空爆が続いていた。調査団訪問の3週間ほど前にも激しい爆撃があり、ケイトたちは生き残った人々の無残な姿にふれ、瓦礫の中を少し歩く度に、家族を失った住民たちの悲痛な声を聞くことになった。永洞里とよばれる町の一角は焼野原となり、どの家族も数人、多い場合は10人もの家族を失っていた。彼女はこう書いている。

> 「両腕がない、ぼろを着た、汚れた男性が私たちの前に立って話したことを私たちは誰も決して忘れないだろう。彼の声は最初は小さかったが、次第に大きくなり、復讐の叫びと変わっていった」。
>
> 「ぼろを着た子どもたちをもつ家を失った母親、そして子どもを失った母親がいた。3週間足らず前までは一緒に暮らしていた家族を失った孤児たち、年配の女性たちや男性たちがいた」。
>
> 「廃墟の下の死体からのぼる吐き気を催させるような臭いが町中に漂い、ワゴンが通ると爆撃された道路にほこりが厚い雲のように吹き上げられていた。私たちがそこにいるあいだに二度、瓦礫の山が崩れるようなドーンという音がした。子どもたちがそれに登っていて、一緒に崩れ落ちたのだった。あまりにも危険な場所だった」。

非軍事施設を軍事攻撃の標的とすることは国際法違反である。しかし、ケイトたちは南浦で「軍事的標的が破壊された後も米軍の空爆は終わっていない－この町が瓦礫の山となり、人々がわずかにもっているぼろ着をまとい壕や洞窟のなかで暮らすようになったときでさえも」という事実を彼女自身の目で見たのである(28)。

調査団は、米軍を信じた人々の悲運に関する証言も得た。南浦のプロテスタント教会の牧師ホ・ヨンユク（46歳）は、「米軍が撤退して中国軍が来ればキリスト教徒が迫害される」、「原爆が落とされる」といった宣伝や噂を信じて米軍と共に南へ逃れようとしたキリスト教徒たちが、教会が用意した船に乗り込んだところ甲板で米軍機から銃撃を受けて殺されたと語った。教徒たちは、これは何かの間違いだと思い、祈りの言葉を捧げ、賛美歌を歌ったが、銃撃はやまず、多数の教徒が死傷したという。牧師は朝鮮語で話し、通訳がそれを英語に翻訳したのだが、この通訳はある箇所で翻訳に困り、言葉につまり、「牧師は『その日はソドムとゴモラのようだった』と言ったのですが、私はクリスチャンではないのでどういう意味かわかりません」と話したという(29)。ケイトが報告記事の中でそん

---

(28) Kate Fleron, 'Rapport fra Nord Korea: Korea er brændt - hus for hus', in Frit Danmark, Årg. 10, nr. 4, juli 1951.p.10.
(29) Kate Fleron and Ida Bachmann, 'Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den':

な通訳の不手際にも言及したのは、もちろん「ソドムとゴモラ」という火炎の中で世界が滅亡するイメージが印象的だからだろう。が、「住民が何を語ったとせよ、通訳者が政治的に好都合な内容に変えて伝えたのだろう」という類の邪推への対抗として、彼女は通訳事情にもふれておこうとしたのかもしれない。通訳者に騙された愚か者として調査団を嘲笑するような態度は実際にしばしば帰国後の調査団員がでくわした反応だったのだが、彼女たちにとってそれはすこぶる心外であったに違いない。調査団は通訳を介した言葉だけを鵜呑みにしたのではなく、朝鮮語で語る人々と通訳者の双方の口調や表情や態度にふれ、人間的な交流の中で話を聴いたのであり、通訳者たちが分からないときは分からないと伝えられた。「ソドムとゴモラ」の音は確かに聞き取ることができるが意味は分からなかったという通訳者のエピソードからは、そんな通訳事情の一端も見えるのである。

ケイト・フレロンたちが訪ねた江西郡では、新井面[30]の集団墓地の調査も忘れがたいものになった。案内をした人民委員長李良淑は、1950 年 10 月 20 日から 12 月 7 日までの米軍占領期間に 1561 人が殺され、そのうち 1384 人は銃殺、354 人は 8 歳以下の子どもであり、57 人は絞殺、50 人は生き埋め、35 人が殴殺、さらに 35 人が焼殺されたと報告している。米軍に死体を埋める穴を掘らされた農民たちもいた。彼らの知らせを受けて、米軍の退却後、住民が同胞たちの埋められた穴を掘り返し、WIDF 調査団の訪問までに 300 体の遺体の身元を確認し、それらを集団墓地に移して埋葬していた。ケイトたちは犠牲者の母親、妻、父親、子どもらに連れられて新井面の墓地を訪ねた。山を登ると台地があり、小さな数多くの埋葬塚があった。キム・ウンイク（30 歳）は夫の塚を指し示し、民主的な教員であった夫は山に隠れたが米軍に見つかって殺され、彼女自身も米軍に捕らえられ、1 か月ものあいだ夫の居場所を訊問され、毎日殴打されたと話した。「米軍がやったというのは確かですか？」と確かめると、彼女はそんな愚かな質問をされるとは思ってもみなかったという顔つきでケイトたちを見つめ、「もちろんです。米軍です」と答えた。「あなたを殴ったのも米軍ですか？」と重ねて尋ねると、やはり同じ答えが返ってきた。キム・クムスン（61 歳）も夫、娘、娘婿が眠る墓地を指さして、米軍が家に来て 3 人を連れ出して殺した、と話した。占領軍の撤退後、死体が埋められていた穴を掘り出すと、娘は銃で、夫と娘婿は銃剣で殺害されており、その両手は切り落とされていた。彼女もまた、殺害したのは米軍だと断言し、「私たちはこの辺りで李承晩軍を見たことがありません。ここにいたのは米軍だけです」と話した。彼女たちの話から調査団は、米軍が朝鮮のレジスタンスのリーダーだとみなした人々だけでなく、その人々の家族をも「人質」として捕まえ、拷問や処刑をしていたことを悟った[31]。

Information, 1969-12-03.

[30] 新井（신정　シンチョン）は、1929 年に桐林面・豊井面および新興面の一部が合併して発足した平安南道江西郡の面である。現在は、甑山郡に編入されている。他方、黄海道には信川（신천　シンチョン）という地名があり、発音が似通っているため紛らわしい。
WIDF 調査団報告書は、デンマーク語の表記では Shin Cheng(新井）と Shinchen（信川）とを分け、チェコスロバキアでは表記が Cín-Cun(新井）と Síncen（信川）と異なっているが、英語版では、両方とも Sinchen であり、区別されていない。日本語版では江西郡の新井面についても「信川面」と表記しているが、これは誤りである。

[31] Kate Fleron and Ida Bachmann, 'Grusomme udryddelseskrig - i Korea, Den' in Information, 1969-12-03

その台地と道をはさんだ向こう側にある泰昌山では、調査のために墓地の内部を自分の目で見ることになった。泰昌山だけでも八つの集団墓地があり、その一つは長さ 80 メートル、もう一つは 70 メートルと、死体を二段に積み重ねるのに十分であった。ケイトたちはその墓地の中に、腐敗した遺体が二段に並べてあり、遺体は手を後ろ手に縛られており、いくつかの頭蓋骨が打ち砕かれているのを見た。その外貌や衣から地域の朝鮮人の遺体であることは明瞭であった。泰昌山にケイトたちを連れてきた女性の一人、タン・プクトン（44 歳）は穴を掘り返して近親者を発見した時の話をした。彼女の兄弟の遺体は、頭を膝の間につっこんで、手は背中で縛られたまま座っている状態で見つかった。目をひらいた死体、背中に赤ん坊をくくりつけたまま殺された母親など、あまりにも怖しかったのでまともに見ることさえできなかったと語った。キム・キスン(58 歳）という農夫は、息子と義理の娘と孫たちが自分が隠れている間に生き埋めにされた、と証言した。彼は後からその場所を探し出し、手を背中でしばられている死体を自分で掘り出したという(32)。

後にケイトは、「その遺体は、北朝鮮軍に殺された南朝鮮の人々の遺体だったのだろう」といった類の邪推に反駁して、もしそうだとしたら集団墓地に調査団を案内した人々もまた南朝鮮の人々だったはずだと、次のように書いている。

> これらの集団墓地、そして北朝鮮のいたるところにあるすべての集団墓地に埋められているのは、北朝鮮人に殺された南朝鮮人かもしれない！それならば、耐えがたい腐臭がする墓地のそばで私たちと並んで立っている途方に暮れた人々は、南朝鮮からやってきた犠牲者の家族でなければならない。夕方に村の郊外の畑で私たちのまわりに腰を下ろしていた人々も同じことになる。そこでは茫然としている人もいれば、泣き叫ぶ人もいた。(33)

そこに眠る近親者のことを話した人々の慟哭、憤怒、悲嘆に直にふれたケイトは、この人々が真実を語っていることを五感で感じ取った。WIDF 調査団は当時から今日まで「中国や北朝鮮の言うことを信じて騙された愚か者」といった冷笑を浴びせられることがしばしばだが、調査団が信じたのには信じるだけの理由があったのである。

---

(32) 前掲『国連軍の犯罪』231～240 頁。平安南道を訪問した調査報告書は、WIDF 調査団報告書の第四章である。
(33) 'Rapport fra Nord Korea', Op.cit., p.11.

第四章　帰国後のケイト・フレロン

第1節　冷ややかな反応

デンマークに帰国したケイト・フレロンは、朝鮮の戦禍を人々に伝える活動に取り組んだ。モニカ・フェルトンが英国に帰るやいなや英国政府によって開発公社総裁の地位を追われたというニュースはデンマークにもすぐに伝わった。ケイトはモニカの解雇を「西側の自由という民主主義政治の理想が今では蝕まれている証拠」だと受けとめ、「もはや西側の人々が自らのリベラリズムへの信念や共産主義的独裁に対する倫理的精神的優越性を論じても、その主張を真剣に受けとめることはできない」と強く非難し、朝鮮の現状に関する最初のまとまった記事を『インフォメーション』紙（6月16日）に寄稿した(34)。同紙は、『自由デンマーク』誌と同じく、占領下のレジスタンス時代から発行が続いていた新聞である。ケイトはさらに英国の労働党系の『ニュー・ステーツマン』誌にも投稿し、モニカが一貫してWIDF調査団の調査が公正なものになるように尽力した事実、彼女が韓国訪問を希望しながらも技術的理由から断念せざるをえなかった事情を明らかにした(35)。

ケイト・フレロンが朝鮮における米軍の戦争犯罪を弾劾したことは、英国のモニカ・フェルトンの解職とあいまってデンマーク国内でも物議をかもし、親米的な人々からの憤慨や攻撃や冷笑的な反応をも呼び起こした。リベラル左派とみなされ、ケイトの記事を掲載した『インフォメーション』紙でさえ、同日の別の紙面に、「ケイト・フレロンは吊るし首にされるべきか？」というセンセーショナルな表題でフェルトンの解職とそれに対するケイトの批判を揶揄するような記事を載せている。それは、「フェルトンを絞首刑にしようというような考えはまったく不条理であり、そんな主張は取り下げられることになるだろう」と言う一方、モニカ・フェルトンの解雇が西側の自由を掘り崩し、自由を高揚させる可能性を損なうものだというケイトの意見を「大袈裟でバランスに欠ける」と一蹴し、「自分たちはケイトのような憤怒も無念も感じていない」と言明し、「フェルトンは旅に出かけ、見てきたことを世界に発表することができたが共産主義国では同じようなことはできなかったであろう」、「私たちが生きる社会の基本的要素に反対する人は、その社会のための政治的職務に就くことができると期待すべきではない」と述べる。他方、モニカやケイトが言うことを確信的共産主義者の発言のように受けとるのもバランスに欠けるとし、「彼女たちは戦争と呼ばれる恐怖を目撃したが、その戦争の原因、そしてその目標、すなわちより大きな恐怖を防ぐという目的を見落としている。彼女たちは石をたたく子どものようだ。そして自身の不器用さと欠点によって、最後には自分たち自身を傷つけてしまうのだ。しかし、子どもたちは吊るし首にされることはない」と文を結んでいる(36)。

重大な議論を「女・子どもの幼稚なたわごと」のように扱う社会の女性差別主義的風潮に、ケイトは怒り心頭に発したことだろう。それから18年余り後、ベトナム戦争が大きな社会的関心を集めていた時期に彼女はこう書いている。

---

(34) Kate Fleron, 'Slutningen og begyndelsen paa en rejse til helvede（地獄への旅の終わりと始まり）', in Infomation, 1951年6月16日）
(35) Kate Fleron, "Mrs. Monica Felton', in New.Sttatesman, 7 Jul 1951
(36) 'Bør Kate Fleron Hænges?', in Information,　1951-06-16.

「1951年に朝鮮戦争を間近で経験した私たちは、現在のベトナム戦争について読むと奇妙な感じがする。残酷さと虐殺は同じだが、西側の反応はまったく異なっている。人々はもはやかつて起こったようなやり方を支持していない。米国やイギリスの政府でさえ、ソンミ村虐殺に関する目撃証言に眉をひそめている。1951年には誰も目撃者たちを気にとめなかった。彼女たちは生命を脅かされ、職を取り上げると脅かされ、ある者は監獄に送られ、総じてまったくあてにならない人々だと宣告された。見てきたことを語った私たちは、もちろん「単なる」女性だった。女性たち、買収されない女性たちはそれだけで私たちの世界では「世間知らず」だとされた。」

「ナパーム弾、焼夷弾、時限爆弾などを使った大規模爆撃や火を消すために水を汲みに出かけようとした人々への銃撃など私たちがいたるところで目撃した建物や人間に対する破壊・殺戮は、それが自分たちの手を血まみれにする行為ではなかったとしても、ジェノサイドとみなされるべきであり、大虐殺と呼ばねばならない」。

「北朝鮮の外務相は、米国がその旗の下で戦争を遂行している国連にこれらの爆撃について報告した。国連からの返答はなかった」。

「また、女性調査団は全世界に向けてその報告書を発表したが、そこに述べられている事例を調査するそぶりを見せる政府はなかった。国連でさえそうだった。

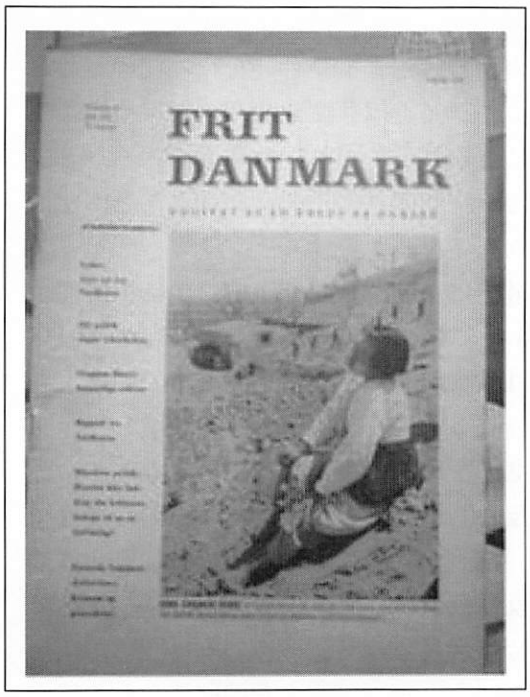
何百万人もの人々ー米国の人々でさえーが、朝鮮での戦争についての私たちの情報に心を動かされた。しかし、マッカーシズムの時代には、政府やマスメディアはマッカーサーの司令部と米国からのメッセージと一致した情報に従わねばならないと感じていた。それがドイツによる占領とそこへの服従からの解放からわずか6年しか経っていないデンマークでも起こったことは見るにも苦々しかった。」(37)

第2節　朝鮮戦争に関する講演・記事・図書

それでもケイト・フレロンとイーダ・バクマンの朝鮮報告に真剣に耳を傾ける人々もまた確かに存在した。二人を送り出したデンマーク民主女性協会やモーウンス・フォーやバウア・ホウマンらのような共産主義者たちはもとより、朝鮮戦争を憂慮して平和を願う多くの人たちもまたケイトたちの話を聴きたがった。トーマス・クリステンセンが『パシフィステン(平和主義者)』紙に書いた記事によると、7月4日にはオーフスで、Mellemfolkelig Samvirke（国際協力のための NGO)がケイトとイーダを招待して講演会を催し、そこに600人から700人にのぼる人々が彼女たちの話を聴きにやってきた。イーダは、米国にも国連にも一国の内戦に介入する権利はないと主張し、北朝鮮に対する戦争が朝鮮の民間人を攻撃している実態を話し、あらゆる外国の軍隊の撤退を訴えた。ケイトは、自分は懐疑的な態度をもちながら朝鮮へ行ったが、実際に自分の目で見たことによって、朝鮮における戦争が人道にもとるものであると言わざるをえなくなったということを強調した。彼女は空襲を避けるための夜の移動がどのようであったか、家や病院さえ破壊され尽くした廃墟でどのように人々が生きているかを目に浮かぶように語り、朝鮮における戦争は国連が

(37) 'Grusomme udryddelseskrig', Op.cit.

関与しているがゆえに私たち全員に責任がある、と訴えた。クリステンセンは、彼の記事の中で「私たちは自分たちの責任を果たし、ケイトに続こう。私たちは戦争を終わらせ、民間人への蛮行を禁じるジュネーブ条約が実施されるように活動しよう」と呼びかけた。そしてケイトとイーダがデンマーク人の反省と責任性を喚起した価値を強調し、デンマークの大半の新聞が彼女たちの意見を否定したり歪めて伝えている、と批判した(38)。



このような人々に励まされつつ、ケイトは『自由デンマーク』誌上にWIDF調査団で朝鮮を訪ねた報告を発表した。7月号の表紙にはうちひしがれる朝鮮人女性の写真と、「無慈悲な爆撃で子どもたちを失えば誰でも彼女と同じだろう」というキャプションがみえる。この号にはケイトが訪ねた平安南道の報告に加えて、江原道や慈江道に行ったグループの報告も収録された。8月号はモニカ・フェルトンたちが訪ねた黄海道の安岳や信川の調査報告が載っている。その表紙には、幼い孫を抱える老婦人の姿が載り、キャプションには、彼女の息子は殺され、娘は虐待を受けたために病臥しているという説明があり、この老婦人に会った調査団メンバーが写真の裏に書いたメモも紹介されている。「これは娘の子どもです-----布で巻き付けられているその子は、肉が落ちているようでした。母乳がなく、食べ物を与えることができない」と。これらの記事は、1951年末までに一冊の単行本『北朝鮮：破壊された国からの報告』にまとめられ、コペンハーゲンのホッフェンスベルスケ社から出版されている（Nord-Korea: Rapporter fra et Hærget Land, København, Det Hoffensbergske Etabl, 1951）。その後も、日本の植民地支配と朝鮮民族解放闘争を紹介する記事「知られざる朝鮮より」（『自由デンマーク』11巻2号、1952年、10-12頁）や「南朝鮮における朝米対決」（『自由デンマーク』

(38) Thomas Christensen, Krigens sande ansigt（戦争の真実の姿）, in Pacifisten. Juli 1951 s.80 デンマーク平和アカデミーのホームページ :http://www.fredsakademiet.dk/tid/1900/1951/juli/juli114.htm

1953 年 9 号 15-18 頁）などの記事を書くとともに、図書『北朝鮮: 1951 年の世界の果てへの旅』(1952)といった単行本も刊行している（Fra Nordkorea：Indtryk fra en rejse til verdens ende, foretaget i maj 1951. Helge Kühn-Nielsen Privattryk, 1952）。

WIDF 調査団への参加は、第二次大戦下のレジスタンスの経験を通して保守派から中道へとシフトしていたケイト・フレロンが、さらに左派へとシフトする契機になった。冷戦の激化を背景に、かつて親しかった富裕市民層の人々の多くが西側の冷戦政治と折り合いをつけていったことに失望し、ケイトは共産党やその大衆組織の主張や運動にさらに近くなり、共産党に入ろうとはしなかったが、共産党やその同調者たちとの友情は深まった。

ケイト・フレロンの本の表紙
Fra Nordkorea：Indtryk fra en rejse til verdens ende, foretaget i maj 1951.
（北朝鮮：1951 年の世界の果てへの旅）
Helge Kühn-Nielsen Privattryk, 1952

本節の最後に、朝鮮戦争停戦協定調印の直前、1953 年 6 月にコペンハーゲンで開かれた WIDF の世界女性大会について述べておこう。この大会には 67 か国から 611 人の女性が参集したが、WIDF を共産主義者が後援する組織とみなす冷戦の風潮を反映し、西側の女性団体からの参加は少なかった。主催国デンマークの WIDF 加盟団体である民主女性協会は、前年 1952 年にルート・ヘアマンが新たに会長になり、多数の女性団体に招待状を送っていた。が、西側の女性団体からの反応は概して消極的だったのである。ケイト・フレロンは、世界女性大会の会場では西側諸国の代表が自国の女性の闘いとその成果にふれず、東側諸国の代表が誰も自国に関していかなる点も批判しなかったことを「悩ましい」と感じ、「残念なことにこれは東側諸国の代表たちの通常の、めったに破られることのない態度であり、東側諸国の代表は皆政府と一体であり、西側諸国の代表は皆自国の政府に反対しているというのが大会の状況で、それが公正でバランスのとれた大会という印象を損ねた理由である」と考えた(39)。しかしケイトにとって重要なのは参加団体の東西バランスではなく、国境を越える女性の連帯の内実であった。彼女はコペンハーゲン世界女性大会をふりかえる記事の中で、インドネシアからやってきたハディプラボウド夫人のことを共感をこめて紹介している。ハディプラボウド夫人はインドネシアの中では共産党とは対立する人民党に属しているが、ケイトとの個人的なうちとけた対話の中でコペンハーゲン世界女性大会に対する大きな共感と満足を語ったという(40)。ケイトは世界中の女性たちが、これまで帝国主義と人種差別主義のために閉ざされていた国境を超えて結集したことに大きな価値を見出していたのである。

大会期間中、元 WIDF 調査団の女性たちは、「朝鮮訪問から 2 周年」を記念して、2 日

(39) Kate Fleron, 'Møde med en ny verden. Tanker omkring K.D.Y.s internationale kvindekongres', in Frit Danmark, Årg.12, nr.4(1953).S.9-10, 14-15
(40) 同前

目の夜、大会を休んでケイトの家に集った。ケイトが招待主として、豊富な美酒やごちそうをゲストに振舞い、乾杯の音頭をとった。中国代表団としてコペンハーゲンにやってきた白朗は、その集まりについてこう記録している。

> ケイトは各人の杯に酒をついでまわり、自分の杯を高く上げて言った。
> 「今日は世界で最高の友人が私の家に来ていただきました。心から最愛の友人たちを歓迎します。私は、朝鮮に行った体験を一生忘れられません。そして私たちの戦闘の友情を忘れることはできません…」と言いながら、真心のこもった涙が流れた。彼女は、1杯目の杯で涙を飲み干し、続いてまた第二杯目をつぎながら言った。
> 「私は偉大な中国を忘れることはできません。中国の貴重な支援がなかったら、私たちの任務はこんなにうまく成し遂げることはできなかったでしょう。白朗さん、中国のため、乾杯させてくださいな」
> 全員が杯をあげた。全員の視線が私の顔に集中した。私たちの祖国に対する愛と敬意がこめられていた！ 特に、次から次へと称賛され、私は中華民族の謙虚という伝統―自己表現に慣れていないーを受け継いでいたが、私の愛する祖国を誇りに感じずにはいられなかった。(41)

白朗が回想するこのエピソードを通して、ケイト・フレロンがWIDF調査団への参加と朝鮮訪問が自身にとっても重大な価値のある経験になったと意識していたことがよく分かる。ケイトが調査団においてオブザーバーの立場を選択したことは、当初はWIDFとの距離感や懐疑の念の表現でもあっただろう。しかし、ケイトはその調査活動に協働した世界の女性たちと友情を深め、朝鮮から帰ると精力的に朝鮮の平和のために活動し、コペンハーゲン世界女性大会の最中には元調査団の仲間たちを自宅へと招いて再会の場を用意する主役になったのである。

帰国後のオーフスにおける報告会でケイト・フレロンが強調したように、一切の予断を排して調査団にオブザーバーとして参加したケイトは自分自身の目で朝鮮の戦禍を確かめたのであり、それだけいっそう彼女の朝鮮報告には迫力と説得力があった。彼女は彼女自身がオブザーバーであることを通して、WIDF調査団が予め報告内容が定まっているような形骸的集団でなく、様々な立場の女性が真実の探求のために一致協働する生命力ある集団として形成されるのに寄与し、彼女ならではの立場からWIDF調査団が見出した朝鮮戦争の実態を世界の人々に伝えることに貢献したのである。

(41) 西田千津訳／白朗「遠方の友を懐かしむ」『アジア現代女性史』第10号、2015年、120頁。

(終わりに)

ケイト・フレロン・ヤコプスンは、政治的立場の違いを超えて人々が団結してナチス・ドイツと闘ったレジスタンスの精神を第二次世界大戦後にも守り続けた。大戦後、冷戦の激化を背景に、ファシズムを経験したデンマーク社会にあってもレジスタンス時代の協働精神が失われていったことに苦渋を感じていたケイトは、西側の冷戦政治に埋没していくかつての保守派の仲間たちに落胆する一方、『自由デンマーク』に依拠し、左派の友人たちと共に活動を続けた。

1951 年の WIDF 調査団はケイトにとってもう一つの転機になったと言えるだろう。朝鮮訪問以降、ケイトは世界各地に展開する抑圧された人々のレジスタンスと国際連帯運動にいっそう関心を向けるようになり、1960 年代から 70 年代にかけてはデンマーク共産党よりもラジカルな論陣を張るようになる。ベトナム戦争時代、ケイト・フレロンはデンマークのラッセル法廷に参加したメンバーになった。ラッセル法廷とは、英国の哲学者バートランド・ラッセルらの提唱によって開かれた、ベトナムにおける米国の戦争犯罪を裁く民衆法廷である。1966 年 11 月に設立され、67 年 4 月にスウェーデンのストックホルム、同年 11 月にデンマークのロスキレで開催され、数々の具体的証拠を挙げて、米国の有罪を宣告した(42)。ケイトは 1969 年には朝鮮へ二度目の訪問を果たしている。米国の帝国主義的介入に対抗するジャーナリスト国際会議に出席したのである。そのとき彼女は平壌で、ロスキレのラッセル法廷で出会ったウィルフレッド・バーチェットと再会している。この国際会議に 100 人以上が参加していたが、その中で朝鮮戦争最中に朝鮮に来たことのあるジャーナリストはケイトとバーチェットだけだった(43)。ケイトはまた 1971 年にはスカンジナビア女性代表団として北ベトナムのハノイを訪問している。

ケイト・フレロンのベトナム反戦運動は、WIDF 調査団参加当時の朝鮮に平和を求める運動とまっすぐにつながっていた。彼女は米国のベトナム戦争が朝鮮戦争で行われたジェノサイドの再現であり、日本や韓国を巻き込んでベトナムに介入を続ける米国が再び朝鮮戦争を再燃させかねないと指摘し、ベトナム戦争の停戦と朝鮮の平和的統一を支持して活動し、朝鮮やベトナムに対する米国の帝国主義的介入を批判する記事を次々に発表した。「アジア人はアジア人どうし戦わせよ」(『自由デンマーク』1965/1966 年 4/5 号 8-10 頁)、「朝鮮・米国・日本」(『自由デンマーク』1967/1968 年 6 号 10-12 頁)、「朝鮮を見よ!」(『自由デンマーク』1968/1969 年 10 号 7-9 頁)、「北朝鮮再訪」『ポリティケン』1969 年 10 月 28 日フレロンとバクマン「恐るべき絶滅戦争 ベトナム戦争のモデルとしての朝鮮戦争」『インフォメーション』(1969 年 12 月 3 日)、「板門店のパンサーたち—非武装地帯の米兵たちの間で」『自由デンマーク』28 巻 8 号(1969・1970 年)などである。また 1971 年には、ウィルフレッド・バーチェットの英語の著作『朝鮮再訪』をデンマーク語に翻訳し、出版している。また、1976 年から 1977 年までデンマーク・ベトナム協会の議長をつとめた(44)。彼女はこれらの国際的な社会連帯活動によって高い評価

(42) 'Russell Tribunal in Fjord Villa': http://kulturstroeg.dk/russelltribunalet-i-fjordvilla
(43) Kate Fleron, ' Efterskrift', in Willfred Burchett, translated by Kate Fleron, Korea igen : Overs : fra Again Korea : Rhodos, (1971), p.217.
(44) 'DVF' s første formand er

を得て、1972年にPH賞、1976年にホーチミン記念金章を受賞している(45)。

以上に述べたとおり1951年のWIDF調査団は、ケイト・フレロン・ヤコプスンがジャーナリストとして、著述家として、また活動家として高い評価を受け、歴史に足跡を残した冷戦時代の国際連帯活動の起点になったとも言えるのである。

---

dødˈ（「初代会長の死去」）:デンマーク・ベトナム協会:http://www.davifo.dk/sites/default/files/userfiles/file/pdf/vn-ajour2006-2-nekrolog-kate-flereon.pdf

(45) 註(4)に同じ。